

平成29年度 岡山県立西大寺高等学校 学校評価書

学校経営目標	コミュニケーション能力(7つの力)の育成を核とした学校づくり ーグローバル化する社会で生きる力の育成ー	重点目標と評価	【中間評価】	【最終評価】	個別評価	総合評価	評価基準
		重点① 授業力向上の取組…ICTの効果的な活用と研究授業の推進 評価：ICTを活用できている教員の割合が80%以上 研究授業を実施または参観した教員の割合が80%以上 学校教育診断アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合が80%以上（生徒）	・普通教室にもICT環境が整備され、多くの教員がICTを活用した授業を行っている。OJT校内チーム研修を行う一方で、他校の研究授業への積極的な参加を促している。	・教員向けアンケートで「ICTを活用している」と回答した者は69.1%。学校教育診断アンケートの同様の項目「ICTは活用されている」では、肯定的回答が92%。教科の特性などもあり、全員が活用とはいかないものの、全体としては高い評価だった。授業用パソコンやDVDプレーヤーも整備され、今後の活用も期待される。 ・OJT校内チーム研修を中心として授業参観や研究授業を行った。また高教研の教科部会での公開授業・研究授業も本校でいくつか実施された。これらの取組を通して、「研究授業を実施または参観した」者は約82%。 ・生徒向けの学校教育診断アンケート「授業の進め方に工夫が見られ、…」では昨年から微増の79%。次期学習指導要領や入試制度の変更に对应できるよう、校内研修も行うなど授業力向上の取組は継続していきたい。	A A B	A	A 当初の見込みを超える取組を行うことができ、目標を上回る達成状況である。
		重点② 「キャリア・ノート」の活用…事前・事後学習と系統性の充実 評価：教育活動全般にわたり「キャリア・ノート」が活用され、系統的な指導がなされている。	・各学年の協力の下、「キャリア・ノート」の完成度を上げてきている。しかしながら、キャリア教育の年間指導計画を示すことができておらず、各行事に系統性を持たせた指導が不十分である。これも含めてキャリア教育の手引きの改善と生徒のより自主的な活用が課題である。	・「キャリア・ノート」は、総合的な学習の時間を中心に活用した。新たに設けた記録のページでは、社会貢献活動の記録や読書の記録、検定試験の結果など、課・学科・学年等が連携して取り組んだ。学年によっては、「キャリア・ノート」を補完するスケジュール帳を導入するなどの取組も見られた。今後、振り返りの時間確保や生徒の自主的な活用を一層進めたい。また、キャリア教育の手引きの改訂、校内研修の開催などで、キャリア教育や「キャリア・ノート」についての教職員の理解を深め、生徒へその意義をもきちんと伝えられるよう努めたい。	A	A	B 当初の見込みどおりの取組を行うことができ、ほぼ目標どおりの達成状況である。
		重点③ 美しい学校づくり…「美しい場所で 美しく歩き 美しく話す」 評価：各分掌、自己で定めた具体的な目標指標に従って総合評価する。	・挨拶、服装、清掃など様々な場面で引き続き指導し、更なる改善を図りたい。	・教室の環境整備などに取り組んできた。清掃は一部徹底できていないところもあるが、概ね良好。ただし、継続した取組は必要。挨拶や身嗜みは、学科や学年を中心に取り組んだ。さらなる改善の余地があり、来年度の新入生から制服のマイナーチェンジを契機にさらなる改善を図りたい。	B	B	C 当初の見込みの取組を行うことができず、目標を下回る達成状況である。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中 間 期			年 度 末					学校関係者評価	
					達成状況	個別評価	総合評価	達成状況	個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ
①	学力向上委員会	公開授業やOJT校内チーム研修等による研究授業を促進し、学力向上に資する授業力の向上を図る。	・OJT校内チーム研修による課題の共有、実践を行う。 ・公開授業・研究授業の成果を踏まえ、本校独自の「授業のポイント」を作成する。	・研究授業を実施または参観した教員の割合が80%以上（教員） ・学校教育診断アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合が80%以上（生徒）	・校外の研究授業等の案内を掲示し参加を促している。 ・「授業のポイント」の一つとして、「本時の目標」を各教室に掲示した。 ・OJT校内チーム研修をスタートさせ、「主体的・対話的で深い学び」を本校の7つの力とリンクさせ、授業研究に取り組んでいる。	B	B	・OJT校内チームでは、「主体的・対話的で深い学び」を共通テーマに、各チームごとにテーマ設定をして授業研究に取り組んだ。 ・研究授業実施者だけでなく、参観者も多く、目標とした「研究授業を実施または参観した教員の割合」は80%を超えた。 ・「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合は79%で、目標達成には届かなかったが、学年によっては80%を超える高い結果を出している。	A B	B	・多くの教員が研究・公開授業を行ったり参観したりして、様々な授業の工夫を見ることができており、授業について話せる機会も増えている。 ・学習の積み残しから授業について行くことが難しくなっている生徒も見受けられることから、「分かりやすく」という点において評価が伸びなかった可能性がある。	・新学習指導要領及び新しい入試に向けた指導方針を明確にして、授業研究をさらに進めること。 ・生徒に、求められる具体的な姿や力を、ルーブリック等で示すことにより、目標を明確にさせること。	妥当である。	適切である。
	教務課	学習環境や学習態勢を整える意識を高め、学力向上に繋がる授業力の向上を図る。	・整備されたICTを有効活用し、効果的な授業を展開していく。 ・共通の目標を立てて授業規律を整え、学習意欲が高まる雰囲気を作りを行う。 ・年間を通した授業目標を明確にして、授業力の向上に取り組む。	・各教科において、ICTを有効活用した授業実践事例を1つ以上あげることができる。 ・各学年、教科で授業規律を整えるための目標を立て、各教室に配置した。 ・学校教育診断アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合が80%以上（生徒）	・ICTは多くの先生方が活用している。今後、各教科に実践事例の調査を行う予定である。 ・「本時の目標」を各授業で明示できるよう、各教室に配置した。 ・各教員がより良い授業を行うために日々教材研究に励んでいる様子がうかがえる。	B	B	・教科としての取組までには至っていないが、ICTを効果的に活用した授業を実践している教員が増えてきている。 ・学習意欲の高まる授業の実践するために、教材研究に時間をかけている教員が多い。 ・学校教育診断アンケート（生徒）「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合79%、昨年度より微増。	A B B	B	・個々の教員としては、何らかの工夫をしているが、課題を共有して組織的に取り組むまでには至っていない。	・情報の集約と発信を積極的に行っていく必要がある。	妥当である。	適切である。
	3年	高校在学時のキャリア教育のまとめとして、また進路決定に向け、ICTを活用した授業研究を実施する。	・「生徒の進路実現への意識が高まる」、「知識が定着する」等、3年次に効果的なICTの活用のタイミングを学年団全教員で研究する。	・第1学期に1度、ICTを活用した授業を実施し、学年団会議で協議を行う。	・学年集会や授業、CCTでICTを活用した。活用のタイミングについては、生徒アンケートをもとに協議する。	B	B	・集会での活用は年間1度実施した。授業では各教科で工夫して活用した報告があった。	B	B	・授業や生徒への説明だけでなく、保護者説明会などで活用することが好評だった。	・大学入試の実施方法が新たな局面を迎えるにあたり、生徒、保護者も含め学校全体でICTを活用し、共通理解、認識を持つ必要がある。	妥当である。	適切である。
	1年	家庭学習時間を確保し、基礎学力の向上を図る。	・家庭学習の時間を毎日2時間以上確保する。授業前準備を万端にして授業に臨む。	・2時間以上家庭学習をする者6割以上。	・2回目（5月）の学習実態調査では2時間以上家庭学習をする者が58名/320名。	C	C	・1月の学習実態調査では2時間以上家庭学習をする者が106名/320名 33%。	C	C	・1月の調査では平均が105分。1時間未満の生徒が74人（約23%）。一番多い分布は1時間～1時間半、次いで1時間半～2時間で、いずれも約20%となっている。全体にもう30分ずつ学習時間を増やす必要がある。	・課題を増やす、進路に対する意識を高めるなど、家庭学習をせざるを得ない状況をつくらないといけない。	妥当である。	単に時間が長ければよいというわけではない。課題を増やすことが逆効果になることもあるとの指摘あり。
	普通科	各学年・進路指導課・教務課と連携し、進路実現のために必要な学力の養成と進路意識の高揚に取り組む。	・授業公開やICT機器を活用した授業方法の研究を通して教員の指導力向上に努める。 ・LHRやCCTの活動を通じて、進路に対する生徒の意識を高め、目標達成に向けた学習活動への動機付けを行う。	・各学年、進路指導課、教務課の関連する目標の達成状況に準じて判断する。	・各教科での研究、取り組みが継続的に行われてると思われる。 ・進路意識の持ち方には生徒ごとの個人差が大きいが、担任等による働きかけは様々な形で行われている。	B	B	・指導力向上に関しては、各種研修会や研究授業への参加・参観等を通して一定の成果は認められる。 ・進路意識については個人差が大きいが、具体的な目標を定めて努力を続けている生徒は少なからず存在している。	B	B	・教員個人レベルでの知識・能力は向上していると思われるが、教科内での共有という点では改善の余地が残る。 ・個々の生徒の置かれている状況が異なるため意識の個人差が大きい。	・教科内での情報の共有やコミュニケーションの機会を意識的に増やすような取り組みが必要であろう。 ・生徒の状況に応じて、適宜個人面接を行うなど、柔軟な個別指導や情報提供が必要と思われる。	妥当である。	適切である。
	商業科	学力向上を目的とした授業改善（ICTの効果的な活用も含めた）を図りながら、授業内容の課題を文書化し共有する。	・研究授業及び公開授業を通し、授業見学を行い、授業づくりに参画する。 ・学期や定期考査ごとに振り返りながら、課題を明らかにする。	・授業内容の課題を共有できるような各科目指導計画書を、主要科目を中心として作成する。	・機会を捉えて、授業における課題や指導法について研修を行った。また、教科「商業」の授業力向上のための各分野における研修会にも参加し、科内の情報共有に努めた。授業の進捗状況は、商業科教員間で連絡調整をし、共有した。	B	B	・年間を通じて、商業に関する学校外での研修会に教員が参加し、商業科内で情報を共有し、授業改善及び業務改善に取り組むことができた。研修で得られた成果で、本校で取り入れられるものについては、取り組んでいく土壌はあるが、新学習指導要領への対応等の課題もある。	B	B	・商業科目はいくつかの分野（大きく4つの分野）があり、学校外での研修会の資料や成果を、資料回覧や担当者間研修、資料整理等で共有することができた。	・商業科内、各学年及び科目担当者間において、主要科目の指導計画書の共同作成や情報共有により、授業改善や授業力向上につながるかと考える。	評価はAでもよいとの意見あり。	適切である。
②	キャリア教育委員会	「キャリア・ノート」を活用し、改善を図る。	・総合的な学習の時間だけではなく、ホームルーム活動の時間や学校行事などでも「キャリア・ノート」を活用する。 ・キャリア教育の年間指導計画を教員間で共有し、事前・事後学習や学校行事同士の関連を理解する。 ・総合的な学習の時間、ホームルーム活動の内容を検討する。	・学校行事や講演会等の事後感想文、社会貢献活動や検定試験の記録などで活用されている。 ・特別活動の全体計画を作成するなどキャリア教育の手引きが改善されている。 ・総合的な学習の時間やホームルーム活動の時間の内容が見直され、指導案が整備されている。	・講演会の事後感想文や社会貢献活動の事後報告書等は概ね良好だが、その他の記録について生徒の自主的な記録までには至っていない。 ・キャリア教育の手引きは、その改善に着手できていない。今後取り組みたい。 ・ホームルーム活動の時間について、指導案の整備は不十分である。来年度の計画立案と並行して、内容面の見直しも行いたい。	B	C	・年度末の振り返りなどを生徒自身が記録し、次年度へ引き継ぐことができた。各種記録について、生徒の自主的な記録が望まれる。 ・特別活動の全体計画は未着手で作成できなかったが、キャリア教育の手引きは、内容を充実させ、改訂版を次年度配付予定である。 ・次年度の総合的な学習の時間では、課題研究の時間を充実させるなどの見直しを行った。指導案の整備は不十分であった。	B	B	・「キャリア・ノート」の各種記録などの目的や活用について、生徒が十分に理解できていない。 ・キャリア教育委員会の開催が年度の後半に集中した。課題点や優先順位を整理し、年度の早い段階から取りかかる必要があった。 ・調査書の様式変更などに向けて、一定の内容の見直しが行えたが、ワークシートでの振り返りや評価については来年度以降の課題である。指導案の整備は、他の分掌との連携強化が必要であった。	・校内研修会を開催し、次期学習指導要領や「キャリア・ノート」について教員の理解を深める。また、生徒向けにはスタートプログラムIで「キャリア・ノート」について理解を深めさせる。 ・「キャリア・ノート」とe-ポートフォリオとの関係は、今後先進校を訪問するなど研究を進める。 ・指導教諭や教務課と連携して、振り返り（自己評価）や評価についての改善に努める。	妥当である。	適切である。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期		年度末					学校関係者評価		
					達成状況	個別評価 総合評価	達成状況	個別評価 総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ		
②	総務課	「キャリア・ノート」の活用を通して、コミュニケーション能力の育成・伸長を図る。	・7つの力の育成を意識しながら、コミュニケーション能力育成プログラムやCCT等の様々な活動を実践する。	・プログラム実施前後のアンケートで、肯定的評価の割合が増加する。	・外部講師による講演会（1年生対象）・研修会（教員対象）を実施し、プログラムに取り組む動機づけを行った。	B	B	・プログラム前後のアンケート結果から、ほぼ例年通りのコミュニケーション能力の伸びが見られた。	B	B	・個々の力で見ると、自己肯定力の伸びが芳しくない。 ・ルーブリック評価表の活用を通して、7つの力への意識を高めさせる。	それぞれのプログラムでの狙いをより明確にし、「キャリア・ノート」への記録のさせ方を工夫する。 ・ルーブリック評価表の活用を通して、7つの力への意識を高めさせる。	妥当である。	適切である。
	進路指導課	「キャリア・ノート」に対応して適切な進路情報を提供し、生徒の進路意識を喚起する。	・『進路便り』等の広報紙や集会、CCTを通して、進路情報の提供を行い、早期からの進路意識の高揚を図る。 ・成績上位者の伸長、成績不振者への指導など、生徒個人に応じたきめ細かい指導を行い、卒業まで諦めずに学習に取り組ませる。	・『進路便り』を各学年、年間12回以上発行する。 ・就職希望者が卒業時に全員内定している。国公立大進学希望者の合格者数が前年より増加している。浪人や特別な事情がある生徒を除き、卒業時の進路未決定者がゼロである。	・『進路便り』は、10月13日現在で、1年18回、2年8回、3年6回発行した。CCTや講演会と連動して、生徒の進路意識の喚起がある程度なされたと考えている。 ・就職希望者のうち、10月13日現在で11名中10名が内定を受けている。年内には全員内定の見通し。センター試験出願者は210名。最後まで学習に取り組ませるという方針が定着しつつある。	A A	A	・『進路便り』の発行回数の目標は各学年とも年度末には達成の見通し。 ・就職希望者は全員内定。商業科、国公立大学推薦入試の合格者が5名と昨年度（2名）に比べて増加。普・国の生徒もセンター試験の得点が昨年度から大きく上昇しており、目標は達成できる見込みである。	A A	A	・CCTやキャリア教育と連動して、各学年の適切な時期に進路情報を提供することができたと考えている。 ・卒業まで粘り強く学習に取り組ませるという方針が浸透している結果だと考えられる。	・低学年でのより一層の進路意識の向上をはかっていく仕掛けが必要。キャリア教育委員会と連携して、生徒のやる気を起こさせるような進路講演会やキャリアガイダンスの選定を行う必要がある。 ・早期に進路を決定した生徒や進路が最後まで決まらない生徒への細やかな指導を行っていく必要がある。	妥当である。	適切である。
	図書課	未貸出者の数を減らすことによって読書に親しむ態度を育て、柔軟性や情況把握力を向上させる。	・読書リレーにクラスで取り組む(協定力) ・ビブリオバトル（新規）で本をなかだちとしたコミュニケーションを体験し、読書に親しむ態度を育てる(発信力) ・読書記録(「キャリア・ノート」)の利用を促す。 ・図書館ディスプレイを利用した生徒有志による本の紹介(実行力・発信力)	・年々未貸出者の数字は増加しており、昨年度は45%に上る(オリエンテーション貸出を除く)。何とか400人未満、できれば350人未満に抑えたい。 ・生徒有志によるオススメ本紹介映像を流す(年間15人程度)。	・ビブリオバトルについては、2年生で和やかに実施できた。1年生でも同様に実施予定。 ・10/31現在、本校図書館での未貸出生徒数は415名(43.5%)昨年と同レベル。読書リレー等に力を入れて昨年よりアップさせた。 ・オススメ本紹介の映像は、定期的に流しているが、生徒を登場させての動画は技術的に難しい。今後の課題としたい。	A B	B	・未貸出者については劇的に改善し、321名(2月末現在)まで減少した。特に、1年生でのビブリオバトル実施、書籍の展示方法の工夫などが効果的だった。貸出冊数も昨年同期よりも生徒分で約2000冊も改善している。読書リレーも含め工夫が実ってきた。 ・昨年度新設した図書館ディスプレイは定期的に活用できているが、動画となると技術的にも難しいのが現状。今後の課題としたい。	A B	A	・読書リレー、ビブリオバトルといった取り組みが奏功し、年度後半に未貸出者、貸出冊数ともに大幅に改善した。未貸出者については中間期に比較して、約100名(約10%)の改善で、急伸と言える状況であった。特に、1年生は未貸出者、貸出冊数ともに大いに改善した。	・読書リレーについては他者への働きかけが苦手な者が図書委員になっていることが多いので、教員の助力が必要。読書LHRの積極実施等。 ・ビブリオバトルはぜひ継続できるようLHR計画に入れること。 ・図書館ディスプレイの活用については、技術的な問題もあるので、可能な利用方法も含めて再検討する。	妥当である。	適切である。図書館と各教科の連携した取組に期待する。
	3年	コミュニケーション能力育成プログラムが全科展開された最初の学年として、1年次から積み上げた7つの力が反映された「キャリア・ノート」を作り上げ、進路指導を行う。	・学校行事やCCTをはじめとする様々な場面で、生徒が7つの力を主体的に発揮できるようにし、進路実現に向け、身に付けた力を活かすことができるようにする。	・「キャリア・ノート」を完成させる。 ・進路指導アンケートの質問9「進路指導の満足度」で、「満足」「まあ満足」と回答する生徒が95%を上回る。	・学年集会や生徒会行事では多くの生徒が主体的に身に付けた力を発揮することができた。キャリア教育委員会と連携し、コミュニケーション能力育成プログラム全科展開初年度の学年として、キャリアマネジメントの観点も踏まえながら「キャリア・ノート」の完成に向け協力していく。	A —	A	・生徒の進路実現に向けた取り組みを観察し、「キャリア・ノート」に「振り返り」の項目を入れ、より活かすことのできるノートにしていくなし。提案をした。 ・アンケート質問9の項目では、94%の生徒が「満足」「まあ満足」と回答した。	B A	B	・コミュニケーション能力育成プログラムの全科展開を通じて、多くの生徒が、自分自身の力を把握することができたことが進路決定に好影響を与えている。	・CCTと進路実現の関連性を感じた。「キャリア・ノート」を活用しながら、担任をはじめとした学年団全体で個々の生徒の理解をさらに進めていく必要がある。	評価はAでもよいとの意見あり。	適切である。
	2年	7つの力の育成（特に、発信力、実行力、自己肯定力の3つの力の強化）。	・CCTや修学旅行前後の学習の中で、自分の意見や考えを発信する機会を多く設ける。 ・スケジュール管理を意識させ、今自分に必要な課題を自ら考え解決する力を伸ばす。	・年度の初めと終わりにアンケートを実施し、自分の力がアップしたと感じる生徒が増える。	・CCTや修学旅行前後の学習で、クラス内や学年全体の中で発表したり、表現したりする機会をできるだけ用意した。人前で話すことに対する抵抗感は減っているようである。 ・スケジュール帳の効果的利用を機会あることに促しているが、クラス差、個人差がある。	B B	B	・2月に再びアンケートを実施し、4月のものと比較した結果、発信力が伸びたと答えた生徒は178名(56%)、実行力は162名(51%)、自己肯定力は144名(45%)であった。 ・スケジュール帳についても同様にアンケート調査をした。「活用できたか?」という問いに対して「はい」と答えた生徒は約35%、「まあまあ」は約75%であった。	A B	B	・生徒が苦手意識を持つ項目なので、5段階評価の1ポイント以上伸びる生徒が1〜2割いればよいと考えていたが、ほぼ半数以上の生徒が自分で伸びを感じているのは期待以上の成果だ。 ・スケジュール帳の活用についても、四分の三の生徒がなんとか活用しようとしていることが分かった。	・発信力や実行力の伸長は、小さな成功体験を積むことにつづき。今後も可能な限り生徒に機会を用意したい。 ・うまく活用できている生徒のスケジュール帳をコピーさせてもらい、学年で共有するなど、上手な活用の仕方をさらに探していきたい。	妥当である。	適切である。
1年	進路意識の高揚を図る。	・「進路の手引き」と「キャリア・ノート」を利用して、進路に関する情報を提供し、理解を深めさせる。	・3学期にアンケートをとり、進路に関する理解が深まった者が9割以上。	・CCTの時間や進路通信（18号）や学年通信（23号）を通して進路に関する情報を提供している。生徒もよく読んで理解しているようである。	A	A	・3学期にアンケートをとった結果、進路に関する理解が深まった者が78%、そうでもない、と答えた者が21%だった。	B	B	・進路通信や学年通信を出すだけでは自分に関係のない(興味のない)情報に興味を持たない。	・通信には内容も興味しながら、彼らの興味を引く内容も入れていくべきだ。	妥当である。	適切である。	
③	生徒課	学校内外での諸活動を通じて、生徒が豊かな人間性や社会人として必要な資質を身に付けるための援助を行う。	・TPOに応じた態度の醸成を通じて、社会的自立に必要な情況把握力・傾聴力を向上させる。 ・社会貢献活動を通じて、協力する力・自己肯定力・実行力の向上を図る。 ・生徒会活動などの特別活動や部活動を充実させ、心身の健全な成長を促す。	・積極的に挨拶をすることができる。 ・制服の着こなしや言葉遣いなどを情況に応じて正しく選択することができる。 ・特別活動や課外活動に能動的に参加し、自らの内面的成長を促している。	・挨拶ができる生徒は増えているが、誰に対してもではない。校内では教員や来客と挨拶をかわすなどの具体的なルールが必要。 ・雰囲気や著しく損なう制服の着崩しはないが、スカートの短い生徒はいる。年度初めに力を入れたリップの指導も尻すぼみ。新仕様の制服で雰囲気を変えたい。 ・特別活動への取り組みは活発で、校外にも誇れる部分である。部活動も最終下校時刻の遵守など節度ある活動ができている。	B B A	B	・校内においては挨拶ができるようになったが、校外では挨拶を返せない生徒はいる。 ・スカートの丈が短い女子生徒は少なからずいる。姿見を活用させ、身嗜みを自主的に正す習慣を身につけさせる必要がある。 ・社会貢献活動・生徒会活動などの特別活動や部活動に多くの生徒が能動的に参加した。秋桜祭などにおけるスマホ特別ルールの遵守については過去最高といえる良い状況であった。	B B A	B	・生徒が意識せずに挨拶が自然にできるように継続的な働きかけが不可欠である。 ・TPOを充分に弁えられず、流行に左右され、アバウトな取組を自らに許している生徒がまだ存在する。 ・特別活動については、最善を尽くそうという生徒の意識を教員が喚起することの重要性が再確認できた。	・生徒に挨拶すれば返されるという安心感を与えるため、全教職員が自ら積極的に挨拶する必要がある。 ・新仕様のスカートになっても、身嗜みの指導はマンパワーによる部分が大きいことを全教職員が自覚する必要がある。 ・社会貢献活動をインターンシップと連動させた計画に変えていく必要がある。スマホ特別ルールを本校の伝統にしていくなし。	妥当である。	適切である。
	厚生課	校内の環境美化に力を入れ、教育環境の整美に努める。	・トイレ、教室を重点的に清掃する。	・トイレ、教室がきれいになることで教育環境が向上する。	・トイレは毎日使用するので、日々の清掃が大切である。だいたいの場所は、清掃が行なわれており良好と考えられるが、一部に不完全なところがあり、関係の先生生徒と協力していきたい。その他の場所については、だいたい清掃は行われているようだ。	B	B	・昨年度と比べると、状況は良いと思われる。ここ数年重点目標として、トイレ掃除を掲げているためか、少しずつ意識の変化が出ていると考える。	B	B	・トイレはピカピカとまではいいないが、一定の状態を保っていると考えている。	・汚さないという意識を高めていくことが、トイレを汚さない一番の方策である。自分の家のトイレと違うので最初は掃除の仕方がわからない生徒もいるが、徐々にできるようになるので引き続き指導をお願いしたい。	評価はAでもよいとの意見あり。	適切である。
	国際情報科	学習環境、身だしなみを整え、学習に向かう姿勢を身に付けることで学力向上を図り、生徒一人一人の希望に合った進路を実現させる。	・掃除、整理整頓を習慣づけ、継続的な身だしなみの指導をする。 ・目標設定、課題等の計画的な取り組みを推進する。	・ホームルームが定期的に整理整頓されており、身だしなみやあいさつに注意を払うことができる生徒が増える。 ・落ち着いた学習できる環境が整い進路実現への意識が高まる。	・ホームルーム環境や身だしなみについては担任が継続的に指導しており、徐々に改善している。 ・3年生では進路へ向けて本格的な取り組みが始まり、進路意識が高まっている。1・2年生も行事を通して学習意欲を高め、進路実現に向けて各自が力を伸ばしていけるよう意識付けができつつある。	B B	B	・ホームルーム環境や身だしなみについては落ち着いた。3年生はセンター試験で情報基礎や英語において高得点を出し、国公立大学出願数が増加したことで、1・2年生にとってもよい刺激となった。イングリッシュキャンプ、異文化理解講座、スピーチコンテストなどを通して2年生が1年生をリードし、学習意欲を高めあうことができた。	B B	B	・一部の生徒について、継続的な指導が必要である。 ・3年生は情報基礎で結果を出すことが、進路の幅を広げること示した。2年生についてはすべての行事に全力を出し切り、1年生に引き継ぐことができた。行事の取り組み運営についての反省を元に来年度に向けて心構えができた。	・日々の声掛けと、クラス全体の協力が必要。 ・上級生の取り組みなどの情報を共有し、目標設定を明確にさせる。英検やITパスポートなど、明確な目標に向けて取り組むことでクラス全体の意欲が高まるため、なるべく多くの生徒が取り組めるように指導していく。	妥当である。	適切である。
	3年	身だしなみなど西高生にふさわしい態度について理解し、「美しく歩く」ことのできる生徒を育成する。また、TPOをわきまえて行動できる「美しく話す」生徒を育成する。	・進路実現を念頭に、日常的な生徒・教職員間のコミュニケーションを重視し、問題のある場合に積極的に働きかける。	・年間の特別指導を5件以下に留め、学年集会における身だしなみチェック（生活点検）で指導を要する生徒が毎回5名以下である。	・特別指導の件数は1件と落ち着いて進路実現に向け取り組んでいる。身だしなみについては、行事や集会、授業で定期的に声掛けをし生徒課の指導を要する生徒はいない。	A	A	・年間の特別指導は1件であった。身だしなみチェックで指導を要する生徒も毎回数名であった。	A	A	・入学時から生活指導を学年の重点目標とし取り組み、一定の効果がみられた。3年間で進路実現をきっかけとした生活指導の重要性を再認識した。	・来年度から制服がマイナーチェンジされることを機会により強く生徒課と連携し、入学時からの指導を徹底する。よりよいコミュニケーションには身嗜みが大切である。	妥当である。	適切である。
	1年	高校生らしい生活習慣、身だしなみ、言葉遣いを身に付けさせる。	・TPOに応じた挨拶や行動をとることができるよう指導する。	・TPOに応じた挨拶、行動をとることができる生徒が8割。(職員室に入室するときにはチェックする。)	・考査後の学年集会で服装・頭髪検査を行っている。職員室に入室するときにはスカートなど服装を整えさせている。	B	B	・職員室に入室してくるとにチェックした結果、9割の生徒がTPOに応じた挨拶、行動ができている。ただし、挨拶の声は小さい。	A	A	・学年集会で服装・頭髪検査を行う時にはきちんとするが、化粧・口紅・スカートの長さについて、なかなか直らない生徒も数名いる。	・学年集会だけでなく、職員室に入室するときには、毎日声かけをする。	妥当である。	適切である。